

『医心方』字音注記出典と加点方針についての一考察 — 『本草和名』『和名類聚抄』との比較を通じて—

加藤大鶴

1 はじめに

院政期の加点を伝える半井家本『医心方』の字音諸注記（反切・類音注・仮名音注・声点）は、字音資料としてどのように位置づけられるのか。稿者は加藤大鶴2002や2005において、声点についてのみ検討を加えてきたが、その過程で学習対象としての「特殊な」ものと、音韻史を担えそうな「自然な」ものが入り交じっていることが分かった。問題はこれが声点以外の、他の字音注記についても言えるのか、言えるとすればどの程度なのかということである。こうした問題を考えるためには、まず字音注記がどのような出典に基づき、どのような基準に従って音注の取捨選択をしたのかという基礎的な作業を経なければならないだろう。

本稿では『医心方』の字音諸注記のうち、反切と類音注を対象に出典文献の推定を行い、従来報告されることがなかった『本草和名』と『和名抄』を出典とするものを中心に報告する。反切や類音注は他の字音注記に比して音形式を他資料と対照することが容易であり、本稿の目的には適していると考えためである。こうした推定のうえで、複数の出典文献を前に、加点者はどのような選択をし、どのような順番で注記を加えたかを検討する。また『医心方』反切・類音注の、字音資料としての位置づけを試みる。

2 調査対象

現存する『医心方』写本のうち、最古のものは半井家旧蔵（奥書によれば天養2年:1145年移点。以後半井家本と称す）と仁和寺本（保元3年:1158年～嘉応2年:1170年に写^{*1}）である。両写本は現在散逸した宇治本からの移点とされている。本稿では半井家本を底本として、データを取り扱う。半井家本巻8にみえる識語には、半井家本への移点状況と宇治本への加点状況が記されている。この識語は字音注記の筆の色（A. 墨筆、B. 濃色朱筆、C. 淡色朱筆）と対応することが松本光隆

^{*1} 杉立義一 1991,p111 に、九条兼実『玉葉』の記述に基づいて書写年代の推定がなされる。

1979・1980a、築島裕 1994 ですでに明らかにされており*2、宇治本に存したと推定される注記を考える上で都合がよいからである。

本稿では両写本における字音注記を比較対照しながら、移点祖本への字音注記がどのような典拠に基づいていたのかを探る。このため、本稿では半井家本と残存する仁和寺本とで比較可能な巻を調査対象とする。残存する仁和寺本は巻1、5、7、9、10、19 零葉*3、27の6巻である。巻1～10は京都仁和寺蔵本、巻27は前田家尊経閣文庫蔵本*4をそれぞれ原本にて確認した。

調査対象とする字音注記は、これらの巻に存する反切・類音注である。半井家本『医心方』の反切については、すでいくつかの先行研究で取り上げられている(3.2にて詳述)。本稿で報告するのは、このうち類音注全々と、『本草和名』*5『和名類聚抄(以後『和名抄』と略称する)』およびいくつかの本草音義書が出典と推定される反切である。

*2 巻8 識語には「初下點 行盛朝臣 朱墨點 墨仮字(改行)重加點

重基朝臣 朱墨點假字勘物又以朱點句」とある。本稿では、A. 墨筆…藤原行盛加點、B. 濃色朱筆…藤原行盛加點、C. 淡色朱筆…丹波重基加點、とし、それぞれA筆B筆C筆と呼ぶ。松本1979・1980aによれば、AB筆は、紀伝道・藤原日野家の、当時としては比較的新しい・仏家色の訓法を伝えているという。

*3 巻19 零葉は小曾戸洋・杉立義一1991の報告によれば仁和寺に蔵されているとのことであるが、小曾戸洋・杉立義一1991所載の影印と、オリエント出版半井家本の影印とを照合することで字音注記を確認した。残存部分は第59葉、オリエント出版の半井家本影印本では45丁裏46丁表に相当する。

*4 小曾戸洋1985において、前田家尊経閣文庫に仁和寺本の僚本が報告された。

*5 本稿末尾に示した日本古典全集刊行会本以外に、台湾国立故宮博物院蔵本(観695)を参照した。本文献は真柳誠1987aでその存在が報告され、自筆識語などから森立之旧蔵影写本とされたものである。なお真柳誠1987bによれば、「多紀元簡が江戸幕府紅葉山文庫に発見した本書の原古写本の所在は明治以降不詳となり、その現存すら定かでない。かつ現行の元簡校刊本とこれを影印した日本古典全集本は校刊時の所改と誤刻が夥し」とされる。稿者も台湾国立故宮博物院蔵本と日本古典全集本を比較することでこれらの異同を確認した。しかし本稿で取り扱った音注形式・音注字・音注字体の問題に関わる異同はなかった。

3 調査結果

3.1 字音注記の概観

『医心方』に現れる字音注記には、反切・類音注・仮名音注・声点がある(表1)。本稿では仮名音注・声点を単独では考察の対象に含めないが、反切・類音注と共に現れる場合は、後掲の出典対照データに掲げたので、参考までに総数を示した。1丁当たり*6の注記数は巻1が最も多いが、これは第一にこの巻が初巻であること、「治病大体部」という総論的内容であることが理由として考えられる。第二に、「諸薬和名第十」という本草の解説と和名を示した部分への加点率の高さがある。この部分は12.5丁分の長さを持ち168の字音注記を数える。1丁当たりの注記数は13.4と、『医心方』中で最も字音注記加点が濃密な部分である。詳細は3.6.1で触れる。

字音注記	巻1	巻5	巻7	巻9	巻10	巻19	巻27	合計
反切	156	17	21	81	14	2	21	312
類音注	52	2	5	0	12	1	6	78
仮名音注	133	32	15	6	21	0	53	260
声点	386	13	15	124	113	0	135	786
注記合計	727	64	56	211	160	3	215	1436
相当丁数	69	55	24	33	40	1	36	260
注記数/丁	10.5	1.2	2.3	6.4	4.0	3.0	6.0	5.6

表1 巻1,5,7,9,10,19,27字音注記総数

また表2に反切・類音注のうち、半井家本と仁和寺本で共通するものと半井家本のみのもとの注記数と割合を、ABCの筆別に示す。数字は字音注記数、()内は両本で共通例の%。

半井家本と仁和寺本で共通する例は、移点祖本の宇治本に存していたものと見てよいだろう。共通例の割合は筆によって異なる。B筆は少数なので判断を保留する

*6 原本は卷子本の形態だが、便宜のために、オリエント出版の影印本に記載される丁相当表記にしたがった。

筆	字音注記	仁和寺本共通	半井家本のみ	半井家本全数
A	反切	136(59)	94(41)	230(100)
	類音注	34(60)	23(40)	57(100)
B	反切	10(56)	8(44)	18(100)
	類音注	0(0)	2(100)	2(100)
C	反切	57(93)	4(7)	61(100)
	類音注	20(100)	0(0)	20(100)

表2 半井家本・仁和寺本共通 ABC筆別

として、C筆はどちらの字音注記も高い割合で共通するに対し、A筆は約半数しか共通しない。宇治本から半井家本へ移点する際に筆の色を選ぶということは考えにくいので、A筆には半井家本への移点の際に別本を参照したか*7新たに加点した例が含まれていることが考えられよう。

3.2 『本草和名』「仁」「楊」および『和名類聚抄』からの引用

『医心方』に現れる字音注記には、出典注記が付されるものがある。特に反切については玉篇をあらわす「玉」「玉篇」「顧野王」や、切韻系韻書をあらわす「切」(切韻)「宋」(広韻)「唐」(唐韻)ほかが見られ、従来字書・韻書逸文研究の対象とされてきた*8。出典注記を付さない、玉篇と切韻を出典とする反切も多数あるが、詳細は別稿で報告することとしたい。

さて反切・類音注に付される上記以外の出典注記に、「仁」「楊」といったものがある。これは『日本国見在書目録』「醫方家」の「新修本草音義一仁撰」「本草注音一楊玄操」のことであろう*9。本稿の調査対象部分では、次の5例*10がある。

*7 卷8識語には「移点比較之間所見及之不審直講中原師長(改行)醫博士丹波知康重成等相共合醫家本畢」とあり、別本からの移点も疑われる。

*8 岡井慎吾 1933、馬淵和夫 1952、上田正 1984、西崎亨 1995 ほか。このほか医史学研究では『医心方』所引文献の出典研究として、吉田幸一 1939、馬継興 1985、新村拓 1985、小曾戸洋・大上哲廣 1994 がある。

*9 『医心方』に引用される「楊玄操音」については真柳誠・沈澗農 1996 にも言及がある。

*10 以下、本稿での用例の掲げかたを説明する。各用例の番号に続く「」内に

1. 「澤鳥」㊸A音昔㊹A又揚和(ママ)也反(0150b4) 仁 ㊸ ㊸ ㊸ 1 参照
草「澤鳥」仁謂音昔楊玄操音私也反(114a6)
2. 「梨蘆」㊸Aヤマウハラ㊹A楊音力兮反(0917b7)
3. 「秦苳」㊸A頭孔カウ仁音交俗作膠非(0143b8) 仁
4. 「析菓子」㊸Cツハヒラクサ㊹C先歴反㊸C頭仁音錫(0143b3) 仁
5. 「炘」㊸Aヒハシ㊹A拆仁勅格反開也或作炘サケ㊹Aホトハラシメテ(0136a9)
仁

結論を先取りすると、『医心方』には『本草和名』からの諸注記引用が一定数みとめられる。その『本草和名』には「仁謂音」「楊玄操音」が多数引用されており、河野敏宏 1988 にも詳細な報告がある。また松本光隆 1980b では、『医心方』の和訓(朱筆に多いという)には『本草和名』からの引用が多くみられるとあり、後掲のように、字音注記を対象とした本調査でも、同資料からと推定される引用を多数確認している(ここでは参考として 1. 「澤鳥」のみ『本草和名』を併記した)。上記 5 例のうち、3 例は『本草和名』に同注記があり、孫引きの可能性もないわけではない。ただし「仁」「楊」を冠する例はわずかに上に挙げたのみであって、なぜ多くは出典を記さなかったのかという疑問は残る。特に上記 4. と 5. に付された「仁」音注は『本草和名』にはない*11。「新修本草音義」「本草注音」から直接の引用も考えられるのではないか。このほか出典注記はないが、『和名抄』からの引用もいくつか見られる。松本 1980b によれば『医心方』和訓には同資料からの引用が認められるという。ただ『和名抄』には『本草和名』を出典とする注記があり、分析には注意が必要である。例えば、河野 1988 によれ

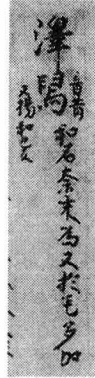


図1 澤鳥

示するのが半井家本掲出形、㊸=声点、㊹=右傍内側、㊺=右傍外側、㊻=左傍内側、㊼=左傍外側、㊽=欄外注。ABCは筆の種類。仁=仁和寺本にも字音注記あり。

草=本草和名、本=和名抄、切=切韻系韻書(広=広韻、上=上田正 1973 の諸本と略称、上=上田正 1984 の逸文と略称)、玉=玉篇(篆=篆隸万象名義、岡=岡井慎吾 1933・馬淵和夫 1952 の逸文と略称および大広益会玉篇)をそれぞれ示す。

*11 4. 「析菓子」の「仁音錫」は、観智院本『類聚名義抄』に「析^上錫^下サク^上」(名義 仏下本 114)とあり、出典注記を誤った可能性もある。『類聚名義抄』を出典とする字音注記については別途報告したい。

ば、『和名類聚抄』の「本草云」「陶隱居本草注云」「蘇敬本草注云」に含まれる字音注は『本草和名』からの孫引きとされるが*12、孫引きの際にはいくつか注の方式を変えているものがあるという。『医心方』の字音注にも『本草和名』『和名抄』とで一致する例としない例があり、『医心方』において両資料がどのような優先順位で用いられたのかを考える足場となりそうである。

以下、3.3では『本草和名』『和名類聚抄』『類聚名義抄』（使用したテキストは本稿末尾に掲げた）からの引用と推定した例を、それぞれ反切、類音注の順に掲げ、検討を加える。

3.3 『本草和名』との一致例

3.3.1 反切

■『本草和名』（『和名抄』との一致含む）と一致し、切韻や玉篇に一致しないもの

1. 「苦 苳」[㊟]C鳥老反 (0155b9) 仁
草「苦 苳」楊玄操音 鳥老反 (144a9) 和「苦 苳」本草云苦苳^{鳥老反 和名加萬奈}_{一云加美於古之奈} (20/6)
2. 「青 葙 子」[㊟]Aウマサク[㊟]A私羊反 (0926a9) 仁
草「青 葙」楊玄操音 私羊反 (142b4) 和「青 葙」本草云青葙^{私羊反 和名 字末佐}_{久一云阿萬佐久} (20/9)
3. 「扁 青」[㊟]A補典反 (0147b7)
草「扁 苳」仁謂音 補典反 (141b5) 和「牛 扁」蘇敬本草注云牛扁^{補典反 和名}_{太知未知久} /佐… (20/8)
4. 「鯉 魚 甲」[㊟]C徒何反 (0163a7) 仁
草「鯉 魚 甲」音 徒何反 (218b8)
5. 「白 蘘 荷」[㊟]C而羊反 (0165b7) 仁
草「白 蘘 荷」音 而羊反 (237b5)
6. 「繁 蔓」[㊟]C去[㊟]C緑珠反(0166a5)仁
草「繁 蔓」仁謂…緑珠反 (239a4)
7. 「訥 沙」[㊟]A乃交 (虫損) 反 (0149b9) 仁
草「訥 沙」仁謂音 乃交反 (111a1)
8. 「枳 實」[㊟]Aカラタチノミ[㊟]A六居尔反 (0905b4) 仁
草「枳 實」仁謂音 居尔反… (156b1)
9. 「枳 實」[㊟]Aカラタチ[㊟]A居尔反 (0924b6) 仁
草「枳 實」仁謂音 居尔反… (156b1)
10. 「莢 蓬」[㊟]C徳[㊟]C古叶反 (0160a2) 仁

*12 ただし『和名抄』『本草云』には『本草和名』が出典とは認められない例も存することが、築島裕 1965、呉美寧 2000、稲崎朋子 2002、などで指摘されている。

- 草「莢蓬」仁謂音上 古叶反… (203a6)
11. 「莢花」⊗C人揺反 (0155a1)
- 草「莢花」仁謂音 人揺反 (139b4)
12. 「鰻鱺魚」⊗C平⊗C力丐反 (0163b1) 仁
- 草「鰻鱺魚」仁謂…力兮反 (220a3)
13. 「射干」⊗C考寒反 (0155a7) 仁
- 草「射干」楊玄操音…考寒反 (141a7)
14. 「藟菌」⊗C去⊗C見殞反 (0155b6) 仁
- 草「藟菌」仁謂音…其殞反… (143b4)
15. 「香薷」⊗C而由反 (0166a1) 仁
- 草「香薷」楊玄操音 而由反 (238a6)
16. 「青蘘」⊗C私羊反 (0166a9) 仁
- 草「青蘘」楊玄操音 松羊反 (241b5)
17. 「粉錫」⊗A先歷反 (0149b4) 仁
- 草「粉錫」楊玄操音 先歷反 (110a1)
18. 「殷孽」⊗A魚竭反 (0142b1) 仁
- 草「殷孽」楊玄操音 魚竭反 (106a8)
19. 「髮髮」⊗C走孔反⊗C又尸潤反 (0160b9) 仁
- 草「髮髮」楊玄操音 走孔反 又 尸潤反… (205b2) 和「髮髮^{髮根}_附」…蘇敬本草注云髮
仁謂音義云音被楊玄操
 髮作操駮走孔反 又私圖
 反和名加美乃禰今案楊說
 是也髮者頭髮見容飾具 (3/6)
20. 「拞菓子」⊗A先歷反 (0151a4) 仁
- 草「拞菓子」楊玄操上音 先歷反… (117b6)
21. 「獮」⊗A(マ)ミ⊗D崔禹作獮音他瑞反(0905b5)仁
- 草「獮膏」崔禹作獮音他瑞反(210a5)
22. 「斛」⊗A德⊗A胡木反 (0154a8) 仁
- 草「斛菜」仁謂音 胡木反 (137a3)
23. 「女萎々蕤」⊗A人隹反 (0150b2) 仁
- 草「蕤核」仁謂音 人隹反… (153a4)
24. 「雄狔」⊗B頭 雄狔 崔氏食經作豚音 徒昆反 (下略) (0913a7)
- 草「豚卵」仁 徒昆反 (209a5)
25. 「藟蘆」⊗A去⊗A古翫反⊗A和名タケ又ハナリ (0721a1) 仁
- 草「藟菌」仁謂音…楊玄操音 古翫反 (143b4)
26. 「釣藤」⊗C去⊗C丁叫反 (0160a2) 仁
- 草「釣樟根皮」楊玄操音…丁叫反… (202b3)

以上 26 例は単字では『本草和名』と一致する。1,2,4-19 は掲出形も同じであるので、『本草和名』から引用された可能性が高い。1-3 は『和名抄』とも一致するが、3 は字体が三者で異なる。河野 1988 によれば『和名抄』に引用される『本草和名』の音注字には、「より簡単な文字に直して注しようとした可能性」のあるものが存

するという。『医心方』は簡略化されていない『本草和名』の音注字に近く、『本草和名』から引用されたか。20 掲出字も字体の問題があるが同様に考える。21-26 は『本草和名』と『医心方』とで掲出形が異なる。3.2 で検討した「新修本草音義」「本草注音」から直接の引用も考えられるが、だとすれば出典注記を付さないのが疑問であるので、まずは『本草和名』からの引用と考えておきたい。

■『本草和名』(『和名抄』との一致を含む)と一致し、切韻や玉篇にも一致するもの

1. 「鼓」㊶Aクキ㊵A是義(二子虫損)反(0906a8)
「鼓」㊶Aクキ㊵A是義反(0910b3)
「鼓湯」㊶A是義反(0925b9)
「香鼓」㊶A去㊵A是義反(0904a3) 仁
「葱鼓湯」㊶B去㊵A是義反(0919a1) 仁
「草」鼓音是義反豆所作也(242b3) 和「鼓」釋名云鼓^{是義反}和^{名久木}五味調和者也(16/22)
「切」㊵是義切
2. 「蓬蘽」㊶C力水反(0164b3) 仁
「草」蓬蘽仁謂音力水反(228a9)
「玉」㊶力水反
3. 「黄芩」㊶Aヒ、ラキ㊵Aハヒシハ㊶A渠金反(0909a4) *仁和寺本対応部分欠
「黄芩」㊶Aヒ、ラキ㊵Aハヒシハ㊶下A渠金反(0925b1)
「草」黄芩仁謂音渠金反(126a2)
「切」㊵巨金切㊶渠金(s6187 全玉)
「玉」㊶渠金反…㊶渠炎渠金二切…(益)
4. 「粽子木」㊶C平㊵C力将反(0159a3) 仁
「草」粽子木仁謂音力将反(158b3)
「玉」㊶力将反…㊶力将切…(益)
5. 「覓實」㊶C胡弁反(0165a9) 仁
「草」覓實仁謂音胡辨反(235a6)
「玉」㊶胡辨切…(益)
6. 「旋復華」㊶C似泉反(0155a2) 仁
「草」旋復華仁謂音似泉反(139b5)
「切」㊶似泉(王一)
7. 「芰實」㊶C奇寄反(0164b5) 仁
「草」芰實仁謂音奇寄反(229b6)
「切」㊵奇寄切
8. 「荳蔻」㊶Aカウレムカウノミ㊵A上音豆下呼侯反(0927b3)
「草」豆蔻楊玄操…音呼侯反(228a3)
「切」㊶呼侯(p3694 王一王二全王唐韻)
9. 「奔豚氣」㊶A徒昆反豕子也㊵Aヤマヌヤマヒ(0109b9) 仁
「草」豚口(判読不能)仁徒昆反(209a5)

切 ㊦徒渾切 豕子也 ㊧音屯徒渾反陸法言 豕子也 麻果云或作狔或作豚孫恂云 豕子初成

10. 「枳椇」 ㊦C 上 ㊧C 居紙反 (0160a7) 仁

草 「枳椇」楊玄操音上居紙反… (204a4)

玉 ㊦居紙反… ㊧居紙切… (益)

11. 「枳椇」 ㊦C 上 ㊧C 俱禹反 (0160a7) 仁

草 「枳椇」楊玄操音… 俱禹反 (204a4)

玉 ㊦俱禹反… ㊧俱禹切… (益)

12. 「粳米」 ㊦C 古行反 (0167a2) 仁

草 「粳米」楊玄操音 古行反 (下略) (244a3)

切 ㊦古行切

以上は、切韻系韻書や玉篇に一致するため、『本草和名』からの引用とはただちに推定しにくいものであるが、2-8,10-12 は掲出形も同じであり、10,11 のように掲出形の2字とも同じものもある。これらは『本草和名』からの引用と考えてよいだろう。

3.3.2 類音注

■『本草和名』に一致(『和名抄』との一致を含む)

1. 「秦 苳」 ㊦A 頭訖カウ 仁音 交 俗作膠非 (0143b8) 仁

「秦 苳」 ㊦A 音 交 俗作膠非 (0152b2) 仁

草 「秦 苳」 仁謂音 交 (125b9) 和 「秦 苳」 本草云秦苳^{音交和名都加里久}佐一云波加里久敷 (20/7)

2. 「葒」 ㊦A 音 紅 (0154a7) 仁

草 「葒 草」 仁謂音 紅 (136b5) 和 「葒 草」 陶隱居本草注云葒草一名遊龍^{葒音紅和名伊沼多天} (20/15)

3. 「蝦 蟻」 ㊦C 音 遐 (0163b2) 仁

草 「蝦 蟻」 仁謂音 遐… (220a9) 和 「蝦 蟻」 …兼名苑云蝦蟻^{遐音}… (19/24)

4. 「蝦 蟻」 ㊦C 音 麻 (0163b2) 仁

草 「蝦 蟻」 仁謂音… 麻… (220a9) 和 「蝦 蟻」 …兼名苑云蝦蟻^{遐音}… (19/24)

5. 「菜 葍」 ㊦C 音 來 (0165b2) 仁

草 「來 葍」 仁謂音 來… (236a6) 和 「菜 草」 辨色立成云 菜 草^{上音來和}名之波 (20/14)

6. 「射 干」 ㊦C 音 夜 (0155a7) 仁

草 「射 干」 楊玄操云上音 夜… (141a7) 和 「射 干」 本草云射干一名烏扇^{射音夜和}安布木 (20/12) 名加里須

7. 「葍 草」 ㊦C 音 律 反 (0157a1) 仁 * 「律」字のみ欠

草 「葍 草」 仁謂音 律 (148a7) 和 「葍 草」 本草云葍草^{上音律和}名毛久良 (20/11)

8. 「及 巳」 ㊦C 音 以 (0155a4) 仁

草 「及 巳」 仁謂音 以 (140a8) 和 「及 巳」 本草云及巳^{仁謂音義巳音以}和名豆木欄久佐 (20/11)

9. 「萌蘖」㊗A ソク㊗A 朔 濁二音 (1016b7)
 [草]「萌蘖」楊玄操音上朔 下音濁 (147a3) [和]「萌蘖」蘇敬本草注云萌蘖朔濁二音此
間音曾久止 / 久... (20/15)
10. 「萌蘖」㊗A トク㊗A 朔 濁二音 (1016b7)
 [草]「萌蘖」楊玄操音上朔下音濁 (147a3) [和]「萌蘖」蘇敬本草注云萌蘖朔濁二音此
間音曾久止 / 久... (20/15)
11. 「繁蕒」㊗A 平㊗C 音煩 (0166a5) [仁]
 [草]「繁蕒」仁謂上音煩... (239a4) [和]「繁蕒」本草云繁蕒繁蕒二音和...
名八久倍良 (17/24)
12. 「菲」㊗C 音九 (0165b7) [仁]
 [草]「菲」楊玄操音九 (237b3) [和]「菲」本草云菲繁有反與致同 和名...
古美良又菜蓂名也 (17/17)
13. 「蛭蝮」㊗C 平㊗C 音腴 (0163a5) [仁]
 [草]「蛭蝮」仁謂移腴二音 (218a9) [和]「蝮蛇」...本草云蝮蛇移與二音和
名奈女久知 (19/20)
14. 「菴蘆子」㊗A 音淹 (0151a2) [仁]
 [草]「菴蘆子」楊玄操上音奄 下音間 (117a8) [和]「菴蘆子」本草云菴蘆子上音淹 和
名波々古 (20/11)
15. 「蛻蛻」㊗C 音蛻 (0163b7) [仁]
 [草]「蛻蛻皮」仁謂音蛻 (221b6) [和]「蛻」蛻蛻野王案蛻始蛻反音 蛻
訓毛沼久 (19/29)
16. 「蛭蝮」㊗C 徳㊗C 音舌 (0163a5) [仁]
 [草]「蛭蝮」仁謂移腴二音 (218a9) [和]「蝮蛇」...本草云蝮蛇移與二音和
名奈女久知 (19/20)
17. 「白芨」㊗C 音及 (0155b4) [仁]
 [草]「白芨」楊玄操音及 (143a6)
18. 「折蓂子」㊗C ツハヒラクサ㊗C 頭蓂 乙 覓 (0143b3) [仁]
 「折蓂子」㊗A 音覓 (0151a4) [仁]
 [草]「折蓂子」楊玄操...音覓 (117b6)
19. 「麻蕒」㊗C 音墳 (0166b1) [仁]
 [草]「麻蕒」楊玄操音墳 (241b6)
20. 「馬刀毒」㊗A 音彫テウ (0129b4) [仁]
 [草]「馬刀」仁謂音彫 (224a2)
21. 「防已」㊗A アヲカツラ㊗A 音以 (0145b2) [仁]
 [草]「及已」仁謂音以 (140a8)
22. 「蓼實」㊗C 音了 (0165b5) [仁]
 [草]「蓼實」仁謂音了 (236b8)
23. 「菴蘆子」㊗A 音間 (0151a2) [仁]
 [草]「菴蘆子」楊玄操...音間 (117a8)
24. 「鹵鹹」㊗A 音魯 (0149b2) [仁]
 [草]「鹵鹹」仁謂上音魯... (109a6)
25. 「蠶實」㊗A 音礼 (0153b2) [仁]
 [草]「蠶實」楊玄操音礼 (132a8)
26. 「戴尾」㊗C 音縁 (0155a8) [仁]

- 〔草〕「戴」音縁(212a3)
27. 「主郵」㊶A 六尤(0720a5) 〔仁〕
 〔草〕「兇督郵」仁謂音尤(111b9)
28. 「蝶蛸」㊶A 脚下消音(0142a8)
 〔草〕「蛸母」音消(214a3)
29. 「殆糖」㊶A 平㊶A タウ㊶A 乙唐㊶A アメ(0135b6) 〔仁〕
 〔草〕「詹糖香」楊玄操…音唐(153b6)
30. 「白堊」㊶A 音惡(0149b3) 〔仁〕
 〔草〕「白惡」仁謂音一各反(109b6) / 「堊灰」聖音惡出兼名苑(110b1)

1-16は『本草和名』『和名抄』に音注があるが、11-13は両資料で音注形式や音注字が異なる。この3例は『本草和名』の方が『医心方』に一致しており、『本草和名』からの引用と考えられる。しかし14は『和名抄』が『医心方』に一致する。同掲出形の別字23は『本草和名』に基づいており、『本草和名』伝写の過程で生じた異同かもしれない。15は「税」を写し誤ったものか。16は少し複雑である。『本草和名』の「蛭蝮」の字音注記は「移」ではおかしく、『和名抄』所引「本草云…」掲出形の「蛭蝮」にこそ該当するものである。おそらくこの箇所は『本草和名』の「蛭蝮」を掲出形として『医心方』に採用したものの、字音注記が該当しないことに気づき、別途改めたか他の典拠に基づいたものであろう。これによりC筆の加筆者が機械的に『本草和名』の音注を引き写していないことが分かる(この項目は説明の便宜上ここに掲げたが『本草和名』『和名抄』のどちらにも一致しないので、後の数的処理には加えていない)。30は『本草和名』と同じ掲出形の箇所からではなく、別形から音注を採用しているのが疑問である。

3.4 『和名類聚抄』との一致例

3.4.1 反切

■『和名抄』に一致(『本草和名』に採録されないもの)し、切韻や玉篇に一致しないもの

1. 「齶」㊶A 俱禹反㊶A ムシカメハ(0721b1) 〔仁〕
 〔和〕「齶 齒」釋名云齶俱禹反 齶齒無之加女波 蟲齶之齒缺朽也(3/20)
2. 「脾」㊶A 俾移反土之精也㊶A ヨコシ(0901b8)
 「脾」㊶A 俾移反(0902a9)
 〔和〕「脾」白虎通云脾俾移反 和名 與古之土之精也 色黄(和3/11)
3. 「脱肛」㊶A 平㊶A シリイツルヤマヒ㊶A 古紅反(0710a2) 〔仁〕
 〔和〕「脱 疔」病源論云疔古紅反 字亦作肛 夜萬 和名 之利以豆流 比肛門脱出也…(1/22)

3例とも和訓まで一致する。2の(0901b8)は義注も一致する。これらは『和名

抄』からの引用と見て問題ないだろう。

■『和名抄』に一致(『本草和名』に採録されないもの)し、切韻や玉篇にも一致するもの

1. 「腎」㊤A時忍反 (0502b1) 仁
 「腎」㊤A時忍反 (0701b2) 仁
 「腎」㊤Aムラト㊤A時忍反水之精也 (0901b9) 仁
 「腎」㊤A時忍反 (0902a9)
和「腎」白虎通云腎^{時忍反 和}名無良止水之精也 色黒 (3/12)
切㊤時忍切㊤時忍 (切一切三王一王二全王)
2. 「腕」㊤Aタ、ムキ㊤B鳥段反 掌後節也 (0931b6)
和「腕」陸詞切韻云腕^{鳥段反 和名 太々}無岐一云宇天 手腕也 (3/13)
切㊤鳥段 (王一王二全王) ㊤鳥段反 同案音 (不) 鳥段反 手腕 (不) 陸詞切韻云腕鳥段反 手腕也 (陸)
3. 「鼈」㊤Aカハカメ㊤A并列反 (1022a1)
和「鼈」本草云鼈^{唐韻 并列反 魚鼈字或}作鱉和名 加波加米 (19/11)
切㊤并列切 (鼈字で検索) ㊤并列反 (陸) (曹) (郭) (唐)
4. 「衄家」㊤A徳㊤Aチク㊤Aハナチ ミユルイヘニハ㊤A頭 女鞠反鼻出血也 (0109a8)
仁
和「衄」説文云衄^{女鞠反 和}名波奈知鼻出血也 (3/5)
切㊤如六切 鼻出血 / 女六切 鼻出血…玉 ㊤女鞠反 鼻血也 ㊤女鞠切鼻出血也 (益)
5. 「噦」㊤A於越反㊤Aサクリ (0930b4)
 「噦」㊤Aサクリ㊤A於越反 (0931b8)
 「噦」㊤Aサクリ㊤A於越反 (0932a3) 仁
 「噦」㊤Aエツ㊤A於越反 (0901a8)
和「噦 噎」唐韻云噦噎^{上 於越反 下 乙劣反}楊氏漢語抄云噦噎 / 佐久利 逆氣也 (3/18)
玉 ㊤於越反…
6. 「臈」㊤A イ㊤A都敢反 (0902a3) 仁
和「臈」中黄子云臈^{都敢反}和名伊 為中精之府 (3/12)
切㊤都敢切 玉 ㊤都敢反…㊤都敢切… (益)
7. 「菌茸」㊤C カノワカツノ㊤A而容反 (0146b2) 仁
和「菌茸」崔禹錫食經云菌茸^{而容反 上渠頊}反上声之 / 重爾雅注云菌有木菌… (16/18)
切㊤而容切
8. 「蝸牛」㊤C古華反 (0164a8) 仁
和「蝸牛」…本草云蝸牛^{上 古華反 和名}加大豆不利 (19/20)
切㊤古華切 玉 ㊤古華反 ㊤古華切… (益)
9. 「癰疽」㊤A七余反 (0721a9)

- 〔和〕「疽」説文云疽七余反俗云發背久癰也 (3/25)
- 〔切〕㊦七余切
10. 「艾菜」㊦A五蓋反 (0154a5) 〔仁〕
- 〔和〕「蓬」兼名苑云蓬一名韮艾也蓬韮二音蓬畢和名與毛木艾… (20/13)
- 〔切〕㊦五蓋切
11. 「遺尿」㊦A奴弔反 (0902a5) 〔仁〕
- 〔和〕「尿」説文云尿奴弔反名由液利小便也 (3/16)
- 〔切〕㊦奴弔切㊦奴弔反 (考)
12. 「吼」㊦A呼后反㊦A鳴也 (0504b7) 〔仁〕
- 〔和〕「嗥」…唐韻云吼呼后反字亦作… (18/23)
- 〔切〕㊦呼后切 牛鳴㊦同 (p3693 切三王一全王) ㊦呼后反…牛鳴也 (唐)
13. 「頸項」㊦B上㊦A璩成居井二反㊦A頭莖也 項在後頸在前 (0902b5) 〔仁〕
- 〔和〕「頸」陸詞切韻云頸希反頸也頸和名久比頭莖也 (3/3)
- 〔切〕㊦巨成切 項頸在前項在後… 〔玉〕㊦居井反
14. 「頸項」㊦B去㊦A胡講反 (0902b5) 〔仁〕
- 〔和〕「項」陸詞云胡講反和名字奈之頸後也… (3/3)
- 〔切〕㊦胡講切㊦胡講反 (陸) 〔玉〕㊦胡講反 頸後㊦胡講切 頸後也 (益)
15. 「糞米」㊦C魚列反 (0166b7) 〔仁〕
- 〔和〕「糞」説文云糞魚列反和名與糞乃毛夜之牙米也… (16/16)
- 〔切〕㊦魚列切 〔玉〕㊦魚列反…

1-6は『和名抄』と和訓も一致する。1 (0901b9) は義注も一致する。これらは『和名抄』からの引用とみてよいだろう。13は義注字「莖」が異なるが『和名抄』と義注の一部が同じである。ただし2つの反切のうち、1つしか一致していないので、他の出典に基づいたか。

3.4.2 類音注

■『和名抄』に一致 (『本草和名』に採録されないもの)

1. 「薏苡子」㊦A音以 (0151a3) 〔仁〕
- 〔和〕「薏苡」兼名苑云薏苡億以…二音 (20/11)
2. 「莞蔚子」㊦A音充 (0151a4) 〔仁〕
- 〔和〕「莞蔚」本草云莞蔚子充蔚二音和名女波之木 (20/12)
3. 「莞蔚子」㊦A音尉 (0151a4) 〔仁〕
- 〔和〕「莞蔚」本草云莞蔚子充蔚二音和名女波之木 (20/12)
4. 「芎藭」㊦Aオムナカツラ㊦A上去隆反下音翳 (0914a3)
- 〔和〕「芎藭」唐韻云芎藭弓翳二音和名本芎藭於蕪荏加豆良… (20/19)
5. 「咳嗽」㊦A六亥 (1946a1) 〔仁〕

- 〔和〕「欬嗽」病源論云欬玄 走二音欬字亦… (3/19)
作咳之波不岐
6. 「喉痺」⑧A コウ①A 六 侯 (0502a8)
- 〔和〕「喉痺」病源論云喉痺侯 婢二音俗… (3/19)
訛云古比
7. 「喉痺」⑧A ヒ①A 六 婢 (0502a8)
- 〔和〕「喉痺」病源論云喉痺侯 婢二音俗… (3/19)
訛云古比
8. 「陰疝」⑧A 音 山 (0707a8) 〔仁〕
- 〔和〕「疝」釋名云疝音 山 阿太波良… (3/21)
一云之良太美
9. 「七疝」⑧A 六 山 (1007b7)
- 〔和〕「疝」釋名云疝音 山 阿太波良… (3/21)
一云之良太美
10. 「黄疸」⑧A タン①A 音 旦 キハムヤマヒ (1001b2) *仁和寺本該当部分欠
- 〔和〕「黄疸」病源論云黄疸音 旦 一云黄病
破波無夜萬比 … (3/24)
11. 「膀胱」①A 旁 光 二音 (1028b6)
- 〔和〕「膀胱」廣雅云膀胱旁 光 二反和名
由波利不久呂 … (3/12)
12. 「膀胱」①A 旁 光 二音 (1028b6)
- 〔和〕「膀胱」廣雅云膀胱旁 光 二反和名
由波利不久呂 … (3/12)

以上は『和名抄』からの引用である可能性が高い。4,10 は和訓も一致する。

ただし4は上字が『和名抄』に一致していない。当該箇所は本文に「芎々」とあり、下字について左傍に「窮」を注記した上で字音注を加える。

下字の音注が『和名抄』を参照したことによって注されたと考えられると、なぜ敢えて「弓」音を採用しなかったのかが疑問である（「去隆反」は切韻系諸本（切二王二全王）の反切に一致）。「芎」「弓」「窮」「窮」4字の所属声母・韻母を調べると、「芎」は溪母東韻3等平声、「弓」は見母東韻3等平声、「窮」「窮」は共に群母東韻3等平声であることが分かる。当該加点者は、この正式な語形が「芎窮」であって『和名抄』に「弓窮」二音が注されているという知識と、踊り字を照らし合わせ、「芎」と「窮」とが同音であるか疑問を持った。ところがそもそも類音注の「弓」と「芎」とが別音であることが分かり、正式音注「去隆反」と記した。また下字については類音注の示す字音に問題がなかったため、そのまま『和名抄』のものを記した、といった事情が考えられようか。



図2 芎窮

3.5 まとめ

以上、3.3と3.4で検討してきた結果を、表3にまとめる。表には、反切と類音注について、それぞれ『本草和名』（『和名抄』との一致も含む）との一致例、『和名抄』（『本草和名』との一致含まず）との一致例を示した。切韻系韻書や玉篇に一致する例も参考として各右欄に掲げてある。数字は仁和寺本にも存する場合の、[]内は半井家本のそれぞれ字音注記数を示す。

筆	反切				類音注	
	草		和		草	和
	切 玉 不一致	// 一致	切 玉 不一致	// 一致		
A	11 [12]	15 [21]	2 [4]	15 [22]	12 [15]	5 [12]
B	0 [1]	0 [1]	0 [0]	0 [0]	0 [0]	0 [0]
C	12 [13]	20 [21]	0 [0]	2 [2]	16 [16]	0 [0]
計	23 [26]	35 [43]	2 [4]	17 [24]	28 [31]	5 [12]

表3 筆別・字音注記出典例数

表3から、『本草和名』についてはAC筆加點者ともに用いているが、『和名抄』についてはA筆加點者のみが用いていると分かる。『和名抄』切韻系韻書・玉篇一致例の2例は、それぞれ切韻系韻書・玉篇を典拠としたと解釈しておく。

また3.3の個別的な検討の中で、『本草和名』『和名抄』で音注字が異なる場合、『医心方』は『本草和名』に一致していた。ところで河野1988によれば『和名抄』は『本草和名』を引用する際に、反切から類音注に音注の形式を変えたものが35例存するようである。本稿では『本草和名』『和名抄』で、反切・類音注と音注形式が対応しないものを取り扱っていないが、河野1988に掲げられた例に限れば『医心方』字音注は『本草和名』反切の方に全て一致しており、本稿の報告を裏付ける。

以上から、『医心方』半井家本・仁和寺本の移点祖本である宇治本の加點事情は次のようであったとひとまず推定される。

1. A筆加點者は『本草和名』を用いて字音注記を加點した。『本草和名』にない字は『和名抄』を用いた。
2. C筆加點者は、A筆加點者が加點しなかつた箇所に、同じく『本草和名』を

用いて加点した。

3.6 字音注記加点の具体相

3.6.1 『医心方』「諸薬和名第十」と『本草和名』

AB筆C筆加点者の加点方針について、より具体的な姿を見るために、3.1で触れた巻1最終部分の「諸薬和名第十」の字音注記を分析する。分析には、半井家本と仁和寺本で一致する例のみを用いる。

当該部分は『医心方』中もっとも被加点率が高く、分析の目的には最も適していると考えられる。また当該部分は築島裕1965ほかにおいて『本草和名』の抄出とされており、構成や立項順、漢名と和名の対照形式もほぼ『本草和名』の方式を継承しているため、『本草和名』との比較もしやすい。『医心方』において当該部分は漢名と和名の引き当てという意味で、特に重要とされていたことは容易に想像されるが^{*13}、字音注記の加点率の高さからは和名だけでなく漢名の発音にも大きな注意が向けられていたことが分かる。

3.6.2 具体的検討

まず「諸薬和名第十」内での反切・類音注について、分布内訳を述べる。当該部分は47bから69bにわたるが、A筆は前半の49aから54aのみに50例(約6丁相当・242項目中)、C筆は後半の55aから67aのみに67例現れる(約13丁相当・421項目中)。内容としては前半部分に(以下『医心方』に引用される『本草和名』の巻名)「第三巻玉石上廿二種」～「第九巻草中之下卅九種」、後半部分に「第十巻草下之上卅五種」～「第廿巻有名無用薬百九十三種^{無和名}*14」と分かれており、ちょうど「第九巻」と「第十巻」でA筆C筆出現の分かれ目と対応しているように見えるが、必然性があるとは考えられない。ここは何か別の事情によってA筆加点者の及ばなかった後半部分を、C筆加点者が補っただけであろう^{*15}。

さて、『医心方』の当該部分において、抄出原本となった『本草和名』の字音注

^{*13} 杉立1991 p.118によれば、この部分は後世独立の写本として流布するとい
う。当該部分が重要視されていたことの傍証となろうか。

^{*14} この部分は双行注にあるように、『本草和名』には存在せず、『医心方』にお
いても字音注記は全くない。

^{*15} なお『本草和名』所引の和訓については前半部分にもC筆が存するので、C
筆加点者は後半部分を別途担当したわけではないと考えられる。前半部分に

記をどのくらい採用しているかを分析したものが表4である。表中、「医のみ」は『本草和名』該当項目に字音注記がなく『医心方』にのみ存するもの、「共通同」は『医心方』と『本草和名』共に字音注記が加点された項目数のうち字音注が一致するもの、「共通異」は一致しないものをあらわす。「本」は『本草和名』である。数字は項目数、()内は%。

表によれば、『医心方』の両加点者は『本草和名』の字音注記を約 1/3～1/2 ほど採用しつつも、別資料も用いていることが分かる。ただし両加点者とも、『本草和名』の該当項目に字音注記が存している場合は、『医心方』

A	医全数 44 (100)		本全数 31
	医のみ 26(59)	共通同 15(34)	本のみ 13
		共通異 3(7)	
C	医全数 66 (100)		本全数 150
	医のみ 18(27)	共通同 44(67)	本のみ 100
		共通異 4(6)	

表4 筆別・巻による分布

の該当項目に改めて別の文献を用いて字音注記を加えることはほとんどない。これはつまり『本草和名』に字音注記がない場合に限って別の文献を参照するということであって、他文献に比して『本草和名』の字音注記にプライオリティがあったことを意味しよう。

なお『医心方』字音注記の全体を母数とした場合、『本草和名』の占める割合がA筆が34%、C筆67%と開きがあるのは、『本草和名』自体で項目当たりの字音注記数が異なることが影響していると考えられ、両者の加点態度が違うとは言い難い。「諸薬和名」前半部分に相当する『本草和名』の字音注記は242項目中31(約13

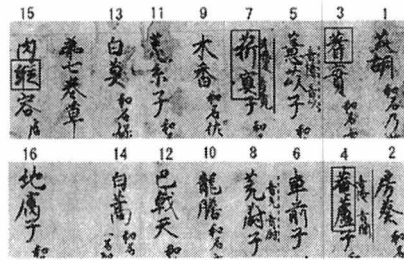


図3 『医心方』0151a部分

%=約1/8)例、後半部分には421項目中150(36%=約1/3)例であって、C筆の典拠となっている部分の方が被加点率が高い。これらの『医心方』への採用率はそれぞれA筆15/31(約48%=約1/2)例、C筆44/150(約29%=1/3)例で、

字音注記を補わなかったのはA筆で十分と考えたからではないだろうか。

A 筆加点者の方が高い割合で『本草和名』の字音注記を採用しているとはいえる。しかし最終的に『本草和名』の被加点率がどのような割合で『医心方』に受け継がれるか、計算すれば、A 筆 $1/8 \times 1/2 = 1/16$ 、C 筆 $1/3 \times 1/3 = 1/9$ で C 筆により高い頻度が認められ、これが結果として表 4 にあらわれているわけである。

むしろ重要なのは、『本草和名』記載字音注の違いにもかかわらず、『医心方』の実際の被加点率が A 筆 44 例/242 項目 (18%)、C 筆 67 例/421 項目 (16%) でほぼ等しくなっていることである。両加点者は『本草和名』だけでは字音が分からない部分を補うようにして、他文献を用いて積極的に字音注を加点したのだと考えられる。

3.6.3 『本草和名』音注を敢えて採用しない例

図 3 は『医心方』巻 1 の「諸薬和名第十」51a を和訓と解説を省略して示したものである。四角に囲った部分は『本草和名』の対応箇所に字音注が存すること、字音注記に付した直線は『本草和名』字音注記に一致すること、点線は一致しないことをそれぞれ意味する。番号は説明の便宜のために付した。図から『本草和名』に字音注が存する 3,4,7,15 のうち 4 (3.3.2 の用例 14、23)、7 (3.3.1 の用例 20、3.3.2 の用例 18) に字音注が採用されていることが分かる。また『本草和名』に字音注がない項目のうち、5 (上字不明、下字 3.4.2 の用例 1)、8 (3.4.2 の用例 2,3) に『和名抄』から引用したと推測される字音注がある。図 3 の 5,8 のように、『本草和名』に字音注がなく『医心方』にのみ存する (表 4 「医のみ」に該当) 例のうち、出典が判明しているものもある。A 筆では『和名抄』、玉篇、切韻系韻書、『本草和名』別項目の字音注、C 筆では A 筆のうち『和名抄』を除いたものが含まれている。

問題となるのは表で「共通異」とした部分である。これらは『本草和名』に字音注が存するのに、わざわざ別の文献から字音注を引いているかにみえるが、実際は以下の A 筆のように説明がつくものもある。

1. 「白 𦵑」ⓐA 音 𦵑 (0149b3) 𦵑
𦵑「白 𦵑」仁謂音 一各反 (109b6) / 「𦵑 𦵑」𦵑音 𦵑 出兼名苑 (110b1)
2. 「藁 耳」ⓐA 私以反 (0153a7) 𦵑
𦵑「藁 耳」仁謂上音 思以反 (131a3)
3. 「夕 藥」ⓐA 時藥反 (0152b3) 𦵑
𦵑「芍 藥」市若反 (126a7)
4. 「菴 蘆子」ⓐA 音 菴 (0151a2) 𦵑

1は『本草和名』別箇所から採用。反切より簡略な類音注を好んだか。3は項目自体の表記が違う。4は字体の違いであり3.3.2の用例14にて既に説明した。問題は2の1例のみだが、これは説明できない。「思以反」「私以反」のどちらも心母止韻3等上声であって、字音としての違いはない。C筆は以下。

1. 「田中 螺 汁」[㊦]㊦C力戈反 (0164a7) 仁
草「田中 螺 汁」崔禹音 洛果反 (224a9)
2. 「芋」[㊦]㊦C于付反 (0165a1) 仁
草「芋」仁謂音 于吁反 楊玄操音 于句反 (231a2)
3. 「葢」[㊦]㊦C側六 (ママ) 反 (0166a5) 仁
草「葢」楊玄操音 菴立反 (239a7)
4. 「茶 菜」[㊦]㊦C大廉反[㊦]㊦Cテム (0165b8) 仁

1の「力戈反」は来母歌韻合口1等平声、「洛果反」は来母哿韻合口1等上声。「螺」の字音は前者であり、『本草和名』の誤りを訂したと考えられる。2の「于付反」は于母遇韻3等去声、「于吁反」は于母虞韻3等平声、「于句反」は于母侯韻1等平声。「芋」の字音は于母遇韻3等去声と虞韻3等平声の2音であるが、義としては去声が正しい。よって『医心方』では『本草和名』を訂したと考えられる。3は「側六(立の字体類似による誤りであろう)反」「菴立反」どちらも莊母緝韻3等入声。「葢」の字音は莊母緝韻2等入声で一致せず、不明である。4は『本草和名』の当該字反切上字が抜けており(日本古典全集本では黒く塗りつぶされている)判読できない。

『本草和名』音注を敢えて採用しない理由に、以上の事情を考えてみた。

4 おわりに

本稿では、出典に関する調査結果とその具体的な分析を通じて『医心方』への字音注記加点について考察を行った。特に3.6では、3.5で得られた基本的な加点方針に加え、次のことが分かった。

1. AC筆加点者ともに、同じく『本草和名』に重きを置いている。
2. AC筆加点者ともに、『本草和名』に字音注記がない場合、切韻系韻書、玉篇ほか(A筆は『和名抄』も)を引用している。
3. 『本草和名』に存した字音注記を別の音注に書き換えているものには、高度な字音知識に基づくものがある。

本稿では字音注記の出典推定と取捨選択に紙幅を大幅に費やしてきたため、冒頭の1「はじめに」での問い、すなわち反切や類音注の字音資料としての位置づけを行うだけの十分な分析は行えなかった。ただ字音注記の取捨選択には、特に反切を加えるにあたって高度な知識が関与していることだけは伺うことができた。これは、正式音注としての反切^{*16}が(日本語の音韻体系では捨象されるような)原音性を正確に表しうるということの一端として理解できる。つまり反切が字音の学習に用いられてきたという先行研究を確認したということであり、冒頭で設定した問題との関わりでは「特殊な」ものであると言える。

本稿での分析を通じて残された問題には、仁和寺本にない半井家本のみに残る字音注記にはどのようなものがあるか、といった諸本の成立に関する事柄や、「諸葉和名第十」に『本草和名』から引用された字音注の原音との一致度や仮名音注・声点との関係、といった字音そのものにかかわる事柄などがある。今後の課題としたい。

参考文献

- 稲崎朋子 2002 『和名類聚抄』所引『本草和名』水門一言葉と歴史 20
 上田正 1973 『切韻残卷諸本補正』東洋学文献センター叢刊 19
 上田正 1975 『切韻諸本反切総覧』均社
 上田正 1984 『切韻逸文の研究』汲古書院
 上田正 1986 『玉篇反切総覧』
 岡井慎吾 1933 『玉篇の研究』東洋文庫
 呉美寧 2000 「図書寮本類聚名義抄所収の植物 和名類聚抄・本草和名との関連を中心に」古辞書と JIS 漢字 3
 加藤大鶴 2002 『医心方』における字音声点の加點目的」国文学研究 137 集
 加藤大鶴 2005 「音調のグループ化—『医心方』呉音系字音二字漢語を資料として—」国語と国文学掲載予定
 川瀬一馬 1955 『古辞書の研究』講談社
 河野敏宏 1988 「和名類聚抄の音注の文献的性格—本草和名の音注との比較による—」愛知学院大学論叢一般教育研究 35-3・4
 小曾戸洋 1985 「新出の『医心方』古写零本卷二十七 一現存した国宝仁和寺本の儼本—」日本医史学雑誌 31-4
 小曾戸洋・杉立義一 1991 「新出の国宝仁和寺本『医心方』零葉 一卷十九第五十九葉」日本医史学雑誌 37-1
 小曾戸洋・大上哲廣 1994 『『医心方』所引文献索引』(『醫心方の研究』オリエント出版)

^{*16} 沼本克明 1987, pp.607-666 ほか。

- 新村拓 1985 『医心方』引用書目(新村拓『日本医療社会史の研究』法政大学出版局)
- 杉立義一 1991 『医心方の伝来』思文閣出版
- 築島裕 1965 「本草和名の和訓について」国語学研究 5
- 築島裕 1994 「半井家本医心方の訓点について」(『醫心方の研究』オリエント出版)
- 西崎亨 1995 「半井家本『医心方』所引『玉篇』覚書き」武庫川国文 45
- 馬継興 1985 『医心方』中的古医学文献初探 日本医史学雑誌 31-3
- 松本光隆 1979 「書陵部蔵医心方の訓方一助字の訓方を中心として」鎌倉時代語研究 2
- 松本光隆 1980a 「平安鎌倉時代における医書の訓読について」国文学攷 87
- 松本光隆 1980b 「書陵部蔵医心方・成實堂文庫蔵医心方における付訓の基盤一和名抄・本草和名との比較を通して」鎌倉時代語研究 3
- 馬淵和夫 1952 『玉篇逸文補正』東京文理科大学国語国文学会紀要 3
- 真柳誠 1987a 「『本草和名』所引の古医学文献」日本医史学雑誌 33-1
- 真柳誠 1987b 「『本草和名』引用書名索引」日本医史学雑誌 33-3
- 真柳誠 1990 「『本草色葉抄』所引の医学文献」日本医史学雑誌 36-1
- 真柳誠 1993 「中国本草と日本の受容」(『日本版 中国本草図録』巻 9, 東京・中央公論社)
- 真柳誠・沈澍農 1996 「『医心方』に記述される「経義解」の検討」『日本医史学雑誌』42-3
- 吉田幸一 1939 「医心方引用書名索引(一)～(三)」書誌学 12-4,13-1,13-2
- 『高山寺古辞書資料第一 篆隸万象名義』(東京大学出版会,1977)
- 『大広益会玉篇』(中華書局,1987)
- 『本草和名』(日本古典全集刊行会,1926)
- 『和名類聚抄』(元和三年古活字本二十卷本, 勉誠社文庫,1978)

一玉川大学文学部(非常勤)一